# とある⊠白銀の競走馬⊠の記録。

乃亞

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※※注意！※※

この作品は、『そのウマ娘が〝白銀の突風〟と呼ばれるまで』に登場する架空ウマ娘、スバルメルクーリの（捏造）史実やエピソードをふらっと投稿する三次小説的な何かです。原作は現状ウマ娘に入れてますがマズそうならオリジナルに変更します。

『白銀の突風』本編をご覧になっていただいた上での閲覧を前提としているため、各種ネ

タバレや馬の時代の話を敬遠したい方は閲覧を回避していただけると幸いです。

# 目　次

Ｒｅｐ１：佐目毛の競走馬の誕生の経緯 ―――― １
Ｒｅｐ２：佐目毛の競走馬がデビューするまで ―――― ４

# Ｒｅｐ１：佐目毛の競走馬の誕生の経緯

１９８２年５月。

後に日本の競馬シーンを大きく沸かすことになる牝馬が生まれることになるのは日本のとある牧場だった。

母親はイギリスとフランスの２カ国のオークスを勝利し、Ｇ１計３勝の名牝ポーニーズ（Ｐａｗｎｅｅｓｅ）。父親は日本競馬会で初の芦毛でのクラシック制覇を果たした

プレストウコウという異色の血統だが、これにはポーニーズの産駒受胎率の悪さに起因している。

４才から繁殖にまわったポーニーズであったが、９才になる本年までに受胎したのは８才時のペリコールのみ。お世辞にも成功とは言えない受胎率に頭を悩ませたオーナーの馬主はここでとんでもない策を講じる。

そうだ、日本の馬を種付けしよう。

補足としてつけるならば、当時は不受胎が続いている繁殖牝馬を妊娠させやすくするために環境を変える…というような話はあった。が、フランスからわざわざ日本に向かわせるあたり、是が非でも２年連続で種付け成功させたいという馬主の必死さが窺える。

当時の日本競馬界といえば８１年にジャパンカップが新設されたことで、海外への挑戦という部分に注目が集まり出した時期。シンザン以降１５年以上空席の三冠馬はいつ生まれるのか。そして世界で通用する競走馬がいつ生まれるのか。こういうところに競馬ファンの視線は注がれていた。そしてそれは生産者側も同じであった。

そしてそんなところに突如としてフランスからＧ１を３勝した名牝が日本に種付けをするために来るという嘘か誠かわからないような情報が駆け巡る。トウショウボー

イやグリーングラス、マルゼンスキーなどの有力種牡馬は軒並み種付けの余裕がない中、白羽の矢が立ったのが毎日王冠での４着を最後に引退直後のプレストウコウであった。

ポーニーズにとってこの日本遠征は果たして成功であった。まさかの一回での受胎に日本側は「本当に不受胎続きだったのか…?」と首を傾げ、フランス側は「やっと安定して受胎してくれる」と肩を撫で下ろしたとか。

ただし、ポーニーズの産駒成績はこのプレストウコウとの仔を除くとわずか５頭のみ、その内４頭は不出走という悲惨な成績になってしまっている。ある種繁殖牝馬としての運をこの馬に全て注ぎ込んでしまったのかもしれない。

そのような紆余曲折を経た後、生まれた幼駒は少し赤みがかった白い体毛に包まれており、出産直後は白毛の突然変異かと思われていた。しかし目の色が白毛の場合は黒や茶色なのに対し、この馬の目は銀灰色であることから遺伝子検査が行われ、変異型ＭＡＴＰ遺伝子をホモで持つことが確認された。こうして約二世紀ぶりに〝佐目毛の競走馬〟が生まれることとなった。

# Ｒｅｐ２：佐目毛の競走馬がデビューするまで

二世紀ぶりに生まれた佐目毛の競走馬こと、ポーニーズの１９８２。この馬のデビューまでの経歴は少々特殊である。まず出産直後に母のポーニーズとフランスへと渡航しているのだが、これは２年連続で受胎したポーニーズの体の都合というものが大きい。

このポーニーズの１９８２はフランスで約半年の生活をするのだが、当時の牧場にわ

ずかに残っている記録としては『とても賢く耳が良い。足音で人や馬の判別ができていた』というものがある。後年ずっとこの馬の問題となる聴覚過敏の兆候は出生直後から出ていたようである。

この半年の生活の間、当初はフランスでのデビューを目指していたが、牝馬であること、馬格の見栄えが悪い、貴重な佐目毛血統を遺したい等の理由で出走登録すらせずに繁殖に回される話も出ていた。

そこで手を上げたのが『スバル』の冠名で知られる張須建三（はりすけんぞう）氏。

自身のルーツが明治時代に日本に渡航してきたいわゆる『お雇い外国人』であり、海外志向の強かった張須氏はプレストウコウの仔が産まれ、しかも佐目毛であること、そしてデビューせずに繁殖入りするかもしれないという情報を得るや否や単身フランスに渡航。正確な記録は残っていないが当時にしては法外な値段でこのポーニーズの１９８２を当歳で購入し再輸入したとされている。

こうしてポーニーズの１９８２は冠名の『スバル』にフランス語で水銀を意味するとされる『メルクーリ』の名を与えられ、『スバルメルクーリ』として競走馬登録されるこ

とになった。

こうして日本でデビューすることになるスバルメルクーリだが、デビュー前からしばしば騒動の的になることがあった。１９７１年からのいわゆる持込馬の空白期間の影響である。

母ポーニーズはフランスから日本に渡航した際、血統登録をした後にプレストウコウと種付けをして受胎したため、スバルメルクーリはカテゴリ的には内国産馬と同等の立場であった。似た経緯を持つ馬としてプレストウコウと同期でスプリンターズステークスを連覇した快速牝馬メイワキミコがいるが、この馬はオークスにも出走（２３着）した。

ではなぜこの馬が騒動の的になるかというと、やはり出生後のフランス渡航が異例中の異例であったからである。

『日本で種付け、受胎した状態で母馬を外国で輸出し、国外で産まれた仔馬を当歳の１２月３１日までに輸入した』場合は内国産馬、『種付けのために外国に輸出された牝馬が受胎して帰国して出産した』場合や、『外国産の牝馬が受胎した状態で日本に輸入され、日本で出産した』場合は持込馬という規定はあるが、『日本で出産した仔馬を国外に輸出

し、その仔馬を国外の厩舎に所属させることなく当歳の１２月３１日までに再輸入した『というスバルメルクーリへの現場の評価は、〝いやー…確かに佐目毛のサラブレッドなんて初めて見たし、確かに日本生まれだけど…。これ持込馬扱いされないのは違くない？〟というものだった。

結局この話題は１９８３年末に持込馬に関する制限の撤廃が行われ、持込馬が内国産馬と同等の扱いに戻ることで終止符が打たれたのだが、ごく一部では〝内国産馬で三冠馬も生まれたし（ミスターシービー、１９年ぶり３頭目）、この馬をクラシックに出走させたかったからなのでは…？〟という噂がまことしやかに囁かれていた。

かつてダービーに出走できず涙を飲んだ持込馬、スーパーカーことマルゼンスキー。そのスーパーカーに一蹴された銀髪鬼（ブレストウコウ）の仔でこのような論争がおこったのは皮肉としかいえない。

そんなデビュー前から競争能力以外の部分で注目の的にされていた競走馬、スバルメルクーリは１９８４年に新潟競馬場での３歳（旧齢）新馬戦についに出走、衝撃のデビューを果たすことになる。